

簡便な組織の健全性診断法

～リスクセンス(RS)診断法とは～

- ① はじめに
- ② 組織事故の未然防止研究の現況とRS診断法の位置づけ
- ③ 研究開発の手法
- ④ RS診断法の活用状況

2021年10月21日
リスクセンス推進研究会
中田 邦臣

① はじめに

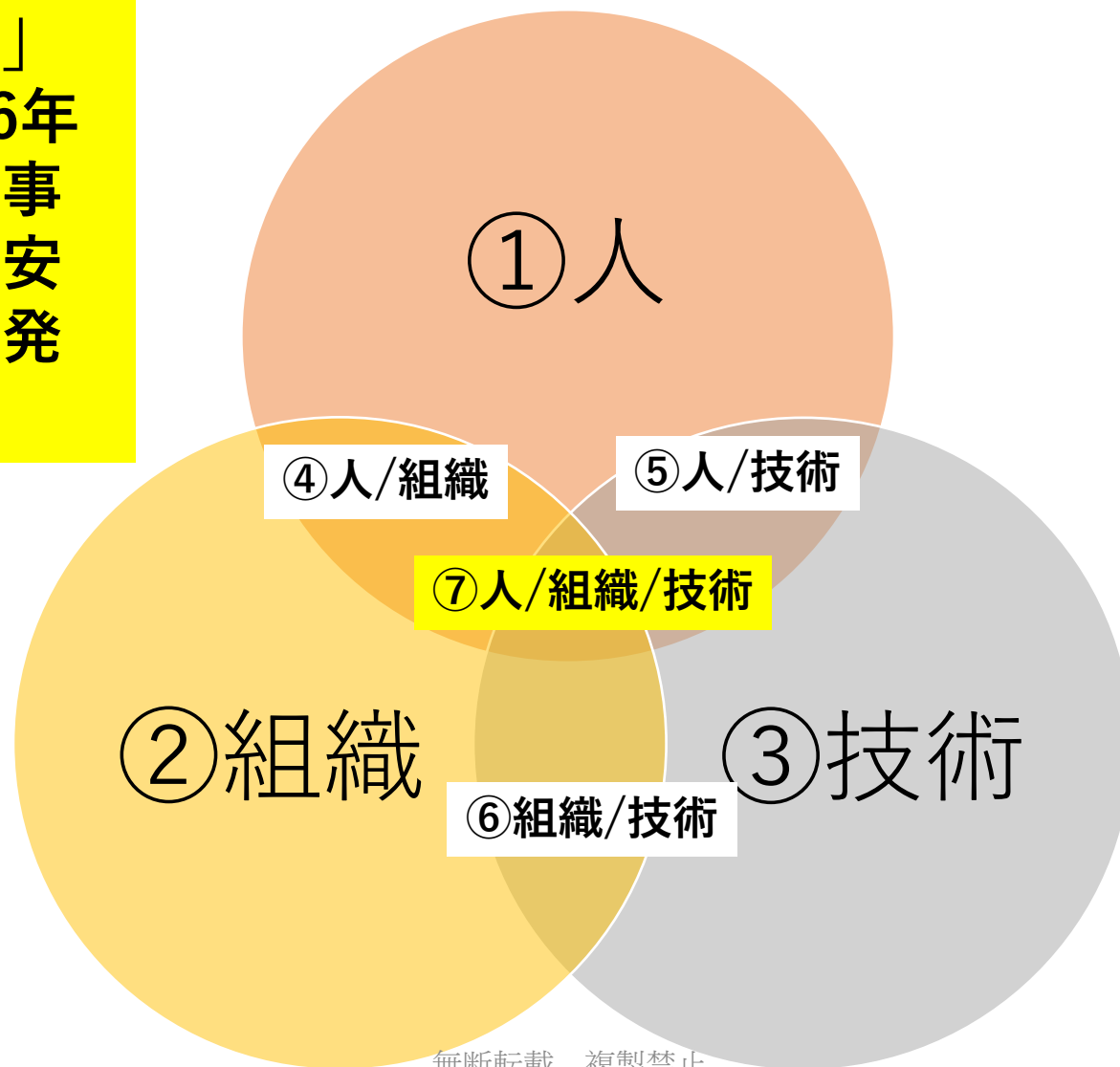
1. RS診断法は、ISOやコンサルタント会社が掲げている手法に較べどんなメリットがあるのか？
 - ➡ 浅野さん、中田が紹介
2. RS診断法の実績は？
 - ➡ 浅野さん、中田が紹介
3. 経営の立場からの「ISOを実施していて、更に新たな手法（RS診断法）を導入することは避けたい！」状況への提案は？
 - ➡ 梅里さんから、2015年に改訂されたISOの内容を先取りした経営実績を踏まえ、ISO他の既存の経営手法との相乗効果を紹介

技術部会として「理科実験」に次ぐ、世に問う活動としてご支援を！

② 組織事故の未然防止研究の現況とRS診断法の位置づけ

(1) 対象とする研究分野

注：「⑦人/組織/技術」
の分野の研究は、1986年
のチェルノブイリ原発事
故を機に提唱された「安
全文化」の研究から活発
になった。



(2) 実用化を目指す分野

	日常心掛けること	いつもと異なった 事象発生時	事故などが発生時
ノンテクニカル	◎	○	○
テクニカル	○	×	×

○は、研究対象とする分野

(3) 開発する手法の位置づけ

診 断	人	組 織
セルフケア	体温、血圧、体重 など	LCB式組織の健康診断® → リスクセンス診断
定期診断	血液検査、尿検査 X線撮影 など	会計監査、内部監査 ISO、OHSAS審査 など
精密検査	胃カメラ、MRI など	保安力向上センターの診断、コンサル タントによる組織診断、公的機関 の立入り検査 など

～ 芳しくない事象に簡便に早く気が付くための診断法 ～

③ 研究開発の手法

1. サイエンスの手法（⇒ 属人的手法からの脱皮）

- ・ 組織事故の発生モデルを提案

- ⇒ 防護壁モデル（既存の組織事故の発生モデルからJ.リーズン提案の「スイスチーズモデル（後述）」を改良）

「組織内で事故が起きない状態とは、防護壁が機能している状態。防護壁の劣化に早く気が付き、適切に対応すれば、組織内では事故などは発生しにくいし、仮に発生しても初期の被害の小さい段階で対応できる（「もぐらたたき」的手法でない、**予兆管理手法**）」

- ⇒ 組織的要因が主で起きた事故や不祥事の事例解析

- ・ 誰もが簡便に組織要因を顕在化させることのできる解析手法の活用

- ⇒ **M-SHEL法、VTA法** + **なぜなぜ分析法**（注）を用いて解析し、業種を超えた事例解析から、組織、人、技術の視点からの組織事故の要因を顕在化

注：浅野さんが第一線の実務職が日常活用できていることを紹介

2. 事故や不祥事の組織的要因の顕在化

→ 日常 活用できる11の予兆管理要因を抽出

3. 防護壁モデルの検証

→ 11の予兆管理要因について、その後の組織事故事例で必要条件であることを証明中

4. 普及手法の開発

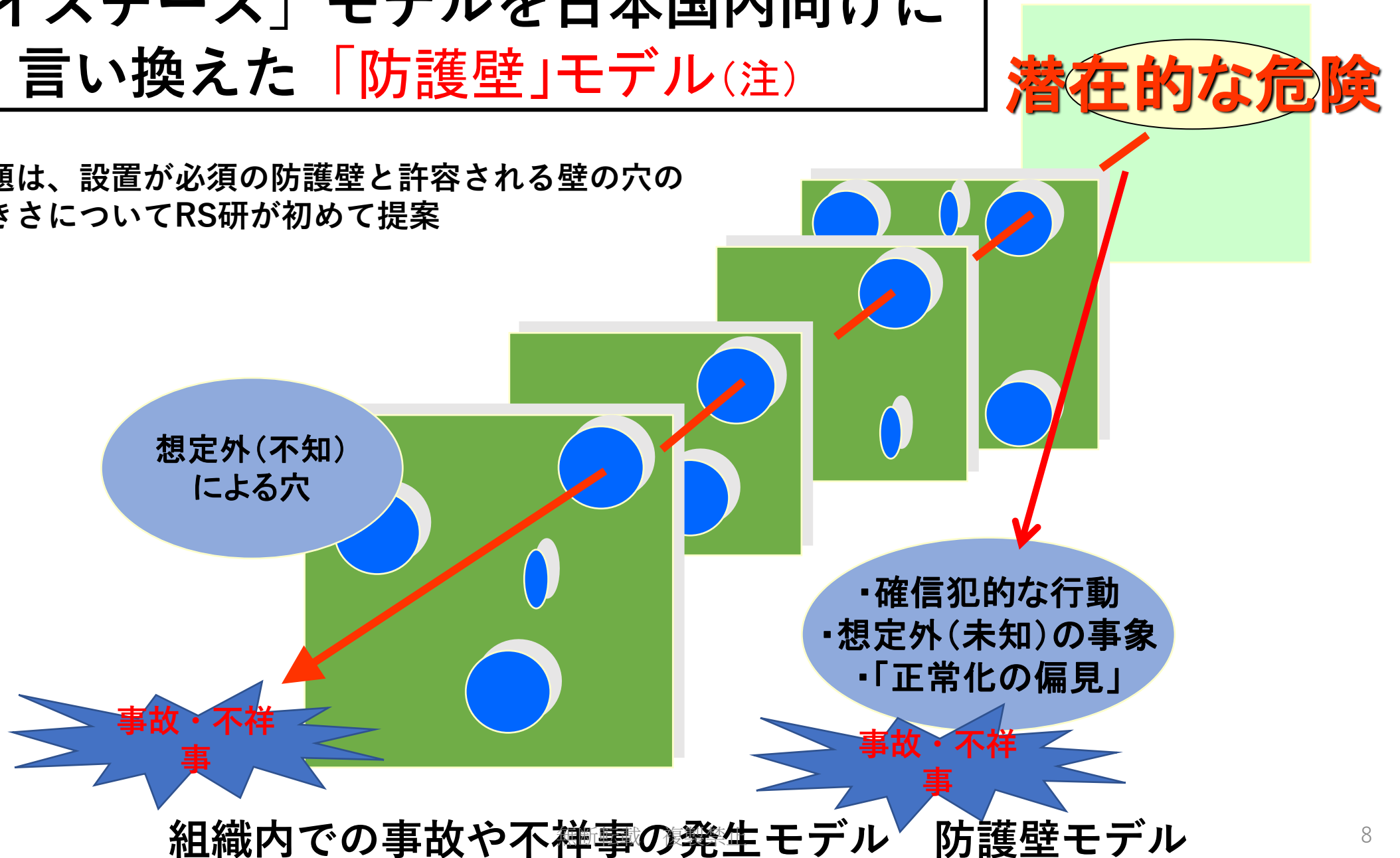
11の診断項目に拠る組織診断法（LCB式組織の健康診断[®]法）と
組織の診断者の11の診断項目への精通度の診断法の開発

→ 組織と個人のリスクセンス診断法（リスクセンス検定[®]）として
普及手法の開発

→ LCB式組織の健康診断[®]を Web式およびペーパー式で実施
できる手法を開発

「スイスチーズ」モデルを日本国内向けに 言い換えた「防護壁」モデル(注)

注：課題は、設置が必須の防護壁と許容される壁の穴の
大きさについてRS研が初めて提案



予兆管理法が開発された経緯

項 目	内 容
誰が	大きな事故（石油化学プラントでの死傷事故）や事件（脱脂粉乳による食中毒事件）、クライシス対応の不手際（原子力研究用プラントでのナトリウム漏れ事故のマスコミ対応）などを猛省した 経営管理職層 と長期に亘って無事故プラントの運転を体験した 経営管理職層 他
なぜ	事故等の背景に在るマネジメント面の教訓を活用でき、事故などの未然防止のため日常のマネジメントで予兆管理法、減災手法として簡便に活用できる手法（⇒ リスクセンス診断法）を開発
いつ	失敗学会（2002年に発足）の中で、組織行動からの視点からの失敗の研究チーム（組織行動分科会）で旗揚げ（ 2005年 ）。その後、失敗学会内での活動が発展しなかったため、有志と学会外の有志が集まり、失敗学会の外にLCB研究会（2007年）が発足⇒ NPOリスクセンス研究会（2011年）発足
どこで	元 日本原子力研究開発機構⇒東京大学⇒東京工業大学⇒大空社⇒ 化学工業日報社
どういう方法	自主研究 ⇒ 科研費研究で開発 2008～10（東京大学）、2011～13（東京工業大学） 助成金研究で改良研究 2020（三菱UFJ信託財団）

④ RS診断法の活用状況（2021年10月21日時点）

（1）診断法活用理由

企業数

- ・組織風土のまずい点を定量的に把握したい (39)
- ・労働安全衛生活動の進捗度を定点観測したい (2)
- ・組織風土改革の進捗度の定点観測をしたい (1)
- ・小集団活動とリンクさせた安全文化を目指したい (1)
- ・新組織発足時の組織風土のベンチマーク測定をしたい (1)
- ・ISO等マネジメントシステムの補完として活用したい (1)
- ・新設する安全研修センターのメニューへの採用 (1)
- ・個人のリスクセンス度向上の意識付けの為に (1)

（2）企業の診断活用分野

ものづくり、IT、エンジニアリング、オフィス

* 医療分野は試行段階

RS診断の活用状況

企業総数47社、受診者数 4,010 名

<業種別>

ものづくり関係 40社

IT関係 3社

オフィス関係 2社

エンジニアリング関係 2社

}	化学関係	36社
	電機・電子関係	2社
	鉄鋼関係	2社

<部門別>

生産系部門 42社

全部門 3社

環境/安全/品質部門 2社

* ものづくり分野は Web式とペーパー式の 2方式で、その他の分野は ペーパー式のみ。

<e-Learningでの活用 3社 >

- ①品質に特化した個人のRS診断から始まり、コンプライアンス、環境、安全の分野も対象にして活用中。1社（グループとして本社を含めた国内外の社員が同一設問で活用、2年間で延 約53,000名活用、2021年度も活用中）
- ②個人のRS向上 1社 国内外の社員が同一設問で活用（2021年度から活用、約1000名活用中）
- ③個人のRS向上 1社 国内執行役員以下が同一設問で活用（2021年度から活用、約1800名活用中）